

海外の状況

1 | ニューヨークのアートハウスの現在

増淵愛子

2020年12月16日の全国コミュニティシネマ会議にて、コロナ禍のニューヨークのアートハウスがどのような状況におかれているのか、簡単にご報告をさせていただきました。以下は、そのときのプレゼンテーション原稿を多少編集、加筆したもので、2020年11月の終わりから12月の初めにかけての状況をお伝えしたものです。

アメリカという国はとても大きいため、州によってコロナの状況も大変異なっています。条令も州によって違うので、どこがどうなっているのか把握するのが難しいです。州や市によってはキャパシティを制限しながら映画館を開けていますが、未だに完全に閉まっている州や市も多くあります。その中でも映画の2大都市ロサンゼルスとニューヨークは2020年3月から映画館は閉まったままです。言うまでもなく、映画業界は大打撃を受けています。

今回は7館のアートハウスで働く方々にお話をうかがいました。私自身がNYと東京を拠点とする映画キュレーターであることもあり、お話をうかがった方々もアートハウスのプログラムを担当している人たちで、運営というよりもプログラミングの話が中心になっています。

日本のミニシアターにそれぞれ個性があるのと同様に、ニューヨークのアートハウスも多種多様です。それぞれ違った色を持っている映画館を選んでいるので、状況もそれぞれ異なりますが、すべての映画館で共通しているのは、2020年3月上旬に条例のもとに休館してから12月中旬まで、9ヶ月以上閉まったままの状態だということです。（※2021年1月現在も閉まったまま）12月上旬の段階ではニューヨークはコロナ感染の第2波の真っ只中で、どの映画館も当分は劇場を開けることはないだろうと諦めていました。上手く行けば春先に開館できるかもしれないと考えているところが多かったです。

NYの映画館の再開を願いながら、映画館の簡単な紹介を交えながらそれぞれの現状についてお伝えしたいと思います。

フィルム・フォーラム [FILM FORUM] | <https://filmforum.org/>

まずはフィルム・フォーラム。NYの独立系映画館の中でも、世界中で認知度が高い映画館です。フィルム・フォーラムは、1970年にマンハッタンのウエスト・ヴィレッジで始まり、最初の20年は場所を転々としていましたが、1990年にハウストン・ストリートに居を定め、現在に至っています。2018年にリニューアル工事を行い、コロナでのシャットダウン前は、4スクリーン、計500席のシアターで毎日上映を行っていました。米国内の新作インデペンデント映画や外国映画を上映するとともに、旧作・クラシック作品の上映などにも力を注いでいる老舗の映画館です。

25人ほどの正規社員を雇用し、アルバイトを入れると50人のスタッフを抱え、年間の運営予算は600万ドル(約6億円)。予算の77%を上映費用に充当しています。非営利団体として運営されており、ニューヨーク市、ニューヨーク州からの支援、個人や会社からの寄付、会費とチケット収入で運営されています。



フィルム・フォーラムで1986年から旧作やクラシック上映を担当しているブルース・ゴールドスティーンさんとお話しました。

2020年3月12日に休館したフィルム・フォーラムは、(数日の差ではありますが)NYのアートハウスの中では最後まで開け続けていた劇場でした。閉館の前日、最後の上映会はヒッチコックの『鳥』だったそうで、他に開いている劇場もなかったこともあり、満席に近かったそうです。閉めたばかりのころは、7月頃には再開できるだろうと予測して、プログラム編成担当は、7月1日からのプログラムを準備し、カレンダーも印刷していたそうです。しかし、状況は一向によくなり、再開は当分諦め、いまではオンライン上映に移っています。

バーチャル・シネマ——オンライン上映

オンライン上映は、アメリカでは「バーチャル・シネマ」と呼ばれています。形態としては、日本の「仮設の映画館」と似たような仕組みが多いです。つまり、配給会社が指定するプラットフォームを経由して配信をし、視聴者は映画館を選んでチケット代を払って映画を視聴します。配信によって得られた収入は、配給会社と映画館で分配する仕組みになっています。アメリカでこのような仕組みをいち早く始めたのは、パンデミック前から独自のプラットフォームを開発していた配給会社Kino Lorberでした。Kino Lorberに続き、他の配給会社もVimeoオンデマンドなどを活用して、プラットフォームを提供しています。フィルム・フォーラムは基本的に配給会社が運営している配信プラットフォームに頼っているので、映画館で上映する際とは異なり、チケットの料金は一律ではなく、作品によって配信システムが違ってきます。

10月中旬にニューヨーク・タイムズ紙が行ったフィルム・フォーラムのディレクター、カレン・クーバーさんへのインタビューによると、その時点で50–60本くらいの映画を配信していて、約9万ドル(930万円)の売上があったそうです。この金額は2018年フィルム・フォーラムで大ヒットした、歌手アレサ・フランクリンについてのドキュメンタリー映画『アメージング・グレース』の一週間の売上より100万円相当を上回った程度の額だと話しています。

募金・助成金

春には10万ドル(約1000万円)の募金を集め、政府からの助成金(給与保護プログラムPayroll Protection Program)6000万円近くを得ることができたことで、正規社員を雇用し続けることができています。しかし、通常の1ヶ月の運営費が2500万円にのぼるフィルム・フォーラムにとって、それでも足りないのが実状です。

フィルム・フォーラムのウェブサイトからバーチャルで映画を鑑賞しようとする、購入時にチケット代の他、映画館へ寄付をするオプションも出てくるようになってきました。ブルースさんは、バーチャルで映画を見てくれる人たちの大半が映画館を応援したい人たちでもあると言っていました。

35年間、フィルム・フォーラムの編成をしてきたブルースさんは、久しぶりに休みを取る時間ができたと笑いながらも、今後再開したときには、いままでのように35ミリフィルムの豪華なプログラムを編成するのは難しいかもしれないと言っていました。



アンソロジー・フィルム・アーカイブス [Anthology Film Archives] | <http://anthologyfilmarchives.org/>

フィルム・フォーラムと同じくマンハッタン南部、ただし東側にあるのがアンソロジー・フィルム・アーカイブスです。1970年に、有名な実験映像作家で、詩人、評論家でもあったジョナス・メカスやスタン・ブラッケージら5人で立ち上げた非営利の映画館です。ここは、作品の修復や保存活動を行うアーカイブでもあり、豊富な資料室も持っています。

フィルム・フォーラムとは運営規模が違い、正規社員は6人と限られているため、閉館したままでも、助成金や緊急援助金、個人からの寄付金で運営を継続することができているそうです。プログラム・ディレクターのジェッド・ラプフォーゲルさんによると、アンソロジーにとって、一番大きな利点はビルを所有していること、つまり、家賃の心配をしなくてよいことだとのことでした。

彼らもバーチャル・シネマを始めたのですが、他のアートハウスとは違い、できる限り無料で配信しているとのことでした。自分たちが所蔵している作品を中心に配信して、(このご時世なので)金銭的な面を心配せずに、様々な人に映画を楽しんでもらえるようにと心がけているそうです。アンソロジーのネーム・バリューもあってか、米国はもちろんのこと、作品によっては世界中から視聴者がアクセスして、ときには1作品1000人台の視聴数があり、盛り上がっているとのことでした。しかし、チケット収入は、通常の入場料収入の5%程度だそうです。

独自のプラットフォームを開発する余裕はないので、Vimeoオンデマンドで配信をしています。ちなみに、2021年1月の終わりまで、ジョナス・メカスを被写体として制作された数々の貴重なドキュメントが「Portraits of Jonas Mekas」(ジョナス・メカスの肖像)という括りで無料配信されています。日本からも視聴可能なので、この機会にぜひご覧ください。 <https://vimeo.com/showcase/jonaspotraits>

実は、アンソロジーはここ数年、50周年に向けてリニューアル工事の準備をしていました。図書室や資料室を建て、カフェスペースもできる予定です。工事が始まれば、一年ほど映画館を閉める予定だったそうで、本来は予定していなかったオンラインでの配信の枠組みを作ることができたので、よいこともあったと言っていました。



リンカーン・センター [Film at Lincoln Center] | <https://www.filmlinc.org/>

リンカーン・センターはアッパー・ウエスト・サイドにあるオペラやバレエなども鑑賞できる、大規模なアーツ・コンプレックスです。この複合施設の中に、Film at Lincoln Centerがあります。

やはり、組織の規模が大きいためか、フィルム・フォーラムやアンソロジーとは異なり、正規社員を解雇する事態となりました。トップに立つ者たちは高額な収入を得ているにも関わらず、スタッフが解雇されてしまうということは、アメリカの大規模文化機関で起こりがちなのですが、リンカーン・センターの場合、解雇されたスタッフがあまりにも多かったので、団体内外から批判を浴びました。その後、政府からの援助金で何とか、正規スタッフを呼び戻すことができたそうです。

リンカーン・センターもバーチャル・シネマへ移行していて、最初はフィルム・フォーラム同様、配給会社のプラットフォームを利用していたのですが、リンカーン・センター主催で毎年秋に開催する「ニューヨーク映画祭」に合わせて、Shift72という会社と連携して独自のプラットフォームを開発しました。ニューヨーク映画祭では

バーチャル上映の他、ドライブ・イン・シアターも行って、盛り上げていました。プログラミング・ディレクターのデニス・リムさんによると、今年の映画祭はバーチャルになったことで、米国全50州から計7万人の視聴者を得ることができたそうです。

また、同時期にリンカーン・センターで起きた大きなニュースとして労働組合の成立があります。組合運動に深く関わっていたスタッフと話してみたところ、やはり、コロナ禍での上層部の対応が火種となり、組合をつくろうという運動が生まれたとのことでした。リンカーン・センターの組合成立は、近年アメリカ中の文化施設で活発化している組合運動の波の一部とも見られます。

ニューヨーク近代美術館 [Museum of Modern Art MoMA] | <https://www.moma.org/calendar/film>

ニューヨーク近代美術館(MoMA)映画部の劇場は近代美術館内にあります。ニューヨークでは、8月の終わりに美術館や博物館は入場制限をしながらオープンしましたが、劇場だけ閉まったままです。パフォーマンスを主体としているリンカーン・センターとは違い、MoMAの方は比較的金銭的な打撃が少ないからか、上層部には減給があったものの、全正規スタッフを雇用し続けていると聞いています。とは言っても4000万ドルの赤字だそうです。

映画部キュレーターのジョッシュ・シーグルさんと話したところ、配信にすぐには移行しなかったものの、2018年から始まったMoMAのオンラインマガジンを通して発信することができたと言います。また、他の団体のプラットフォームを通して共催事業も積極的に実施してきたそうです。

2020年12月11日には独自のオンライン・プラットフォームを開設し、以後、世界中の新作映画を限定配信しています。現時点では、視聴は米国に住むミュージアム会員に限定されてはいるものの、アメリカの会員数は10万人以上で、視聴者数は心配していないとのこと。MoMAの会員であれば、どの映画も無料で視聴できます。ちなみに、記念すべき最初の配信作品は原一男監督の新作『水俣曼荼羅』でした。

バム・フィルム [BAM Film] | <https://www.bam.org/#Film>



バム・フィルムはニューヨークでもマンハッタンではなく、ブルックリンにあるアーツ・コンプレックスBAM (Brooklyn Academy of Music)の中にあります。リンカーン・センターと似た形態で、ここも正規スタッフが解雇されてしまう事態となりました。しかし、BAMでは2019年6月に労働組合が成立していて、解雇されても保険

の継続など、いろいろなことに関してスタッフが交渉をすることができたと、映画部プログラマーのジェシー・トラッセルさんは言っていました。また、労働組合によって、横の繋がりが成立していたので、相互扶助的な互助組合が可能になり、スタッフ同士が日々助け合っているそうです。

パム・フィルムもバーチャル・シネマを始めていて、配給会社のプラットフォームに頼りながら配信をしているとのことでした。ジェシーさんは、バーチャル上映のいいところは、動員数をあまり気にせずに編成ができるので、いままではなかなか上映する機会がなかった短編も堂々と上映できるところだと言います。劇場が再開しても、バーチャルだからこそできるプログラムもあるという信念で、バーチャルも並行して続けたいと言っています。ちなみに、私が話したどのプログラマーも、今後も何らかの形でバーチャル上映は続けるだろうと口を揃えて言っていました。

—



メトログラフ [Metrograph] | <https://metrograph.com/>

この映画館が、他のアートハウスと大きく異なるところは、非営利の運営ではないことです。比較的新しい映画館で、2016年にマンハッタンのチャイナタウンにできました。とてもオシャレな内装で、2階にはレストランもあります。2019年から配給事業も始め、コロナ禍では独自のデジタル・プラットフォームを早い段階でつくっています。そのプラットフォームを使って、配給会社として、他の映画館に自社の作品を配給しています。

メトログラフのバーチャル・シネマは、ひと味違う試みをしています。他の映画館同様、一定の期間レンタルできる仕組みになっている作品の配信もしているのですが、「タイムド・スクリーニング」、映画館のように時間指定がある限定上映も行っています。メトログラフのプログラマー、アリザ・マーさんは、非営利ではないため、予算立てに柔軟性があるところが強みだと言います。非営利だと方針ひとつ変えるたびに理事会や役員などの了承を得ないといけないのですが、営利だと、一握りのインベスター（出資者）と話すだけで新しい方針を決められるとのことでした。アリザさんによると、正規社員は全員、休館する前と同じくらい忙しいとのことでした。

—



スペクタクル・シアター [Spectacle Theater] | <https://www.spectacletheater.com/>

最後に、2010年にはじまった、スペクタクル・シアターをご紹介します。ブルックリンにある「マイクロシネマ」と称される、小さな映画館です。この面白いところは、スタッフが全員ボランティアというところです。30人くらい座れる小さな劇場で、チケットは5ドルです。開館当時からチケット代は変わっていません。開館したの頃からスペクタクルの運営に関わっているスティーブ・マックファーレンさんによると、ボランティアは計30–40人。そのうち、10–15人くらいが、劇場の運営に携わっているので、コアメンバーと言えるそうです。誰もスペクタクルから給料を得ていないので維持し続けられているとのことでした。給料を支払っていないため、給与保護プログラムのような援助金は一切もらえないそうで、有志の募金で家賃を払っているとのこと。家賃は5年毎に契約を更新していて、その交渉がたまたま2020年だったため、映画館が閉まっている間は家賃を半額にしてもらうという交渉が成立したと言っていました。

スペクタクルは2020年3月25日に初のバーチャル上映を行っていて、自称「NYで最初にバーチャル・シネマを始めた劇場」だと言っていました。創立当初からパンク精神を大事にしているスペクタクルは、Vimeoのようなプラットフォームではなく、あえてルールはずれなゲーマーのプラットフォームTwitchを使って配信を試みました。Twitchはチャット機能があるので、動画配信中、視聴者同士みんなワイワイとチャットしながら見ることができます。もちろんそれが目障りだと感じる人たちもいるし、面白い試みだったものの、

Twitchでは配信地域の制限ができないなど、難点もいろいろあったそうです。そんなこともあって、12月頃、ボランティアのひとりが独自のプラットフォームを構築し、現在はそこで配信を行っています。地域制限ができないと配信させてもらえない作品が多いのですが、新しいプラットフォームではその問題は解消されたそうです。

配信ではチケットは売らない方針で、チケット収入はないのですが、スペクタクルを応援したいという人たちからの寄付で上映権利料などを支払っているそうです。

最後に

とてもざっくりとしたレポートとなりましたが、少しでもニューヨークのアートハウスの現状が伝わっていれば嬉しいです。日本同様、コロナ禍で映画館同士がお互いに情報共有などし、連帯が生まれているのも確かです。また、大半の映画館が正規社員を保持できていても、劇場が開いていないため、非正規スタッフはほぼ全員失業という事態が続いています。この問題にいち早く気づいた有志たちが集まり、パンデミックの最初の頃にCinema Workers Fundというクラウド・ファンドが立ち上げられ、職を失った劇場スタッフへ、とにかく失業手当などが手に入るまでの足しになるように、お金が分配されたりもしました。

今年(2021年)の春先には劇場を再開できるのではと期待している人たちが多かったのですが、まだまだどうなるかわからないのが現状です。期待通り、春先に開いた頃には閉館からほぼ一年が経過していることとなります。しかし、どの上映者もニューヨークのシネフィル文化に絶対的な信頼を置いている様子でした。劇場が再開すれば、ニューヨークの人たちは必ず映画館に戻ってくると。

増淵愛子[ますぶちあいこ]

東京・下町出身。東京・ニューヨークを拠点とする映画キュレーター・プロデューサー・翻訳家。MoMAの映画部や自然史博物館等での経験を経て、2013-18年ジャパン・ソサエティ映画部のシニア・プログラマーを務める。2018年からはフリーランスとなり、フィルム・フォーラムなどでゲスト・プログラマーとして仕事をしている。プロデュースをした空音央(そら・ねお)監督の『鶏・The Chicken』は2020年ロカルノ映画祭でワールド・プレミアされ、国際映画祭を巡回中。2021年春には英訳した鈴木いづみ著のSF短編がVerso Booksにて出版される。